

日 仏 文 化 比 較 試 論

——(1) 挨拶を考える——

中 村 啓 佑

Le premier approche de l'étude comparative entre deux
langues et deux sociétés

——(1) L'acte de saluer au Japon et en France——

Keisuke NAKAMURA

は じ め に

この論文は、「ことばを手掛かりに日仏文化を比較する試み」の出発点である。「ことばと文化」の関係を言語学や言語社会学的な立場から論ずるのではなく、「ことばのもつ意味の広がり、使われ方、ことばが使われる環境や、そのことばの歴史的背景を通して、日仏それぞれの文化を総合的に考えよう」とするものである。

問題に対する関心は突然現れたわけではなく、二つの学問の流れを辿る中で次第に明確になっていったのである。その第一は言語学であり、筆者が出会った順に言うと、ウルマンの意味論、鈴木孝夫の言語社会学、ソシュールの言語論などである。第二は柳田国男の民俗学である。学問の対象は必ずしも遠いところにあるのではなく、ごく身近な日常の中にあるという柳田の思想は、フランスだけを求めて青春を過ごした筆者にとって新鮮な驚きであった。そして、この両面から母語と母文化に対する考察を重ねるうちに、本学において「ことばと文化・フランス語」が開講となり、それまでの資料を整理しなおすこととなった。こうして蓄えられたメモやノートが本論の土台を形成している。

言語、あるいはコミュニケーションの領域に限るなら、類似の試みがなかったわけではない。フランス語の意味論的考察については、すでに泉邦久の著作があり、当然学問の性質上、日本語との比較が行われている。また、フランス人と日本人の身振りを比較して論じたものとして

は、大木充の仕事がある。しかしながら、いずれも研究の対象はフランス語とフランス人のコミュニケーションであり、研究の目的は、そちらの特色を明らかにすることであった。これに対して、ここでは、フランス語と日本語の両方を同じ比重で考察する。しかも言語の領域にとどまらず、それぞれの言語を用いている社会の生活・文化の特性にまで論及しようとする。

さて、こうした試みはいくつもの危険をはらんでいる。なかでも戒めるべきは、単純で意味のない比較に陥ることである。というのも、文化が違えば、そこに生きる人達の生産／消費／使用の形態が異なるのは当然であり、生活様式が違えば、思考様式や概念が異なってくるのは自明のことである。ましてや、日本とフランスのように、異なった自然環境に位置し、異なった歴史を背負った社会であればなおのことであろう。比較をするためには、そこに明確な共通点がないければならない。たまたま語は異なるけれども、一見同じ機能、同じ意味領域をもっているのではないかと思わせるような語を比較する必要がある。そして、当然、芸術や思想や学問のような、違いの明確に現れる文化の表層部ではなく、生活のもっとも基本的な部分、すなわち、人間が生きてゆく上で必要な、類似性の大きい文化の基底部に注目すべきであろう。そうした現象の中から、第1回は「挨拶」を考察の対象としたい。

第1章 挨拶の意味と機能

従来、挨拶は研究の対象としてよりも、礼儀の問題として扱われてきた。適切な挨拶ができるかどうか、すなわち、社会における規範が守れるかどうか問われてきたのである。日本の母親は「ご挨拶した?」とたずね、フランスの母親は《T'as dit bonjour?》と念をおす。

挨拶そのものが独立して学問の対象となりにくかったのは、それがあまりに日常的であり、機械的であり、自明のことだからであろう。日ごろ挨拶を実践しているわたしたちは、何のために挨拶するのかなどと改めて考えようとはしない。しかし、ちょっと距離をおいて眺めてみるといくらかでも疑問は出てくる。一定の情報を担うわけでもないのに、外国語を学ぶ際には学習項目の筆頭に位置する。非常に堅苦しい挨拶があるかと思えば、「やあ」とか「どうも」ですませることもできる。「こんにちは」や「さようなら」など意味不明のものも少なくはない。一体、挨拶語には意味があるのかないのか。挨拶は生活のどういう局面に現れるのだろうか。更に、挨拶は、それをさむ前後の行為やことばとどういう関係をもっているのだろうか。一口に言えば、挨拶は人間にとってどのような意味と機能と役割を担っているのか。

1) 社会的機能

今仮に朝の出会いの場面を想像してみよう。

- | | | |
|-----------|----------------|----------------|
| 1. A：おはよう | 2. A：おはようございます | 3. A：おはようございます |
| B：おはよう | B：おはようございます | B：おはよう |

この簡単な挨拶ことばの組み合わせだけでも、話し手どおしの年齢や階層、そして両者の関係が、あるていど推測できるのではないだろうか。1の場合も2の場合も、それぞれ対等の関係であるが、1の話し手と2の話し手は、それぞれ別の年齢層に属しているように思われる。3では、両者の関係は明かに対等ではない。会社の上司と部下、学校の先生と生徒、年齢の大きく隔たった二人などが浮かんでくる。

しかし、これらの挨拶ことばは、これだけで使われることはなく、実際には前後に、別のことが付いてくるはずである。今3をとりあげれば、例えば次のような展開が考えられよう。

A：課長、おはようございます。

B：ああ、山田君、おはよう。

こうなると、二人の関係はいっそうはっきりするだけでなく、それぞれの姿勢や表情までが見えてくる。挨拶ことばは、前後にさしはさまれる呼称や、ことばに連動する表情、身振りなどと一体になって、話し手どうしの関係を表現したり確認したりすると言えよう。

関係を表現し確認するという働きは、挨拶が行われる場合と挨拶ゼロの場合を比較して考えるといっそう明確になる。男子高校生Aと女子高校生Bは親しいクラスメートであり、朝の出会い、いつも上の1におけるような挨拶で始まる。ところが、ある朝A君が「おはよう」と言ったのに、Bさんは何も言わず行ってしまった。挨拶ゼロという突然の関係の変化にA君の心中穏やかならざるものがあるに違いない。こうした日が数日続き、そしてある日突然Bさんの「おはよう」が笑顔とともに戻ってくる。関係が修復されて、Bさんは再びA君の友人であることを宣言したのだ。

今度は、挨拶のまったくなかった状態から挨拶が行われる状態への移行が、ときにどれほど大きな意味をもつか、小説の中から一例を見ることにしよう。

(...) 二週間も立つた頃であつたか、或る夕方例の窓の前を通る時、無意識に帽を脱いで礼をした。其時微白い女の顔がさつと赤く染まつて、寂しい微笑の顔が華やかな笑顔になった。それから岡田は極まつて窓の女に礼をして通る。³⁾

要するに、人間関係の接点において成される挨拶という行為は、社会的関係の伝達であり、確認である。挨拶することによって、わたしたちは自分と相手の間にある関係を宣言している

のだ。岡田の脱帽は、思わず表出してしまった *étranger* から *non-étranger* への移行宣言である。

社会学者折橋徹彦は、表象機能と呈示機能という語を使って次のように説明している。表象機能とは、世の中のことがらについて情報を運ぶ働きである。呈示機能とは、伝達者自身のあいだの関係についての情報を送ることである。挨拶は、情報を伝えようとしているのではなく、関係について情報を送っているのである。「いいお天気ですね」というとき、天候に関する情報の問題であれば、相手は「言われなくてもわかる」と言うであろう。このことばが担っているのは、一定の情報よりも友好的関係の確認である。関係の伝達ないしは確認の機能を「挨拶の社会的機能」と呼ぶことにしよう。

2) 心理的機能

先に「人間関係の接点」ということばを使ったが、接点というのは当然分離点のことでもある。鈴木孝夫のことばを借りるなら、挨拶とは「ある程度の時間的隔たりを経て、出会う、遭遇する場合に起こる現象」であり、「別れるという節目のときにも挨拶が起きる (...) それまでの人間同士が付いたり、離れたりするその接点のところで挨拶という行為が起きる」ということになる。要するに挨拶は日常生活の節目で現れる。

わたしたちは連続した心理的時間を生きている。しかも、その内容は、一人一人すべて異なっている。夫婦にせよ、家族にせよ、睡眠中に見る夢を含めて、一人一人が違った意識生活を送っているのだ。ある意識が別の意識とぶつかるとき、すなわち、二つの意識が互いを対象にして相互交換を図るとき、言ってみれば、モノローグの世界からディアログの世界に入るとき、そのときわたしたちは、異次元に入るゆえの重苦しさや緊張を覚え、それなりの覚悟を必要とする。個人としての意識世界がすべてを許された世界であるのに対し、複数の意識の衝突や交流がさまざまな制約を課するからであろうし、言語以前の混沌の中を自由に泳ぎ回っていた意識が、言語という形式の鎧を身につけて不自由な動きを余儀なくされるからであろう。

この重苦しさ、この緊張を和らげるためには、何らかの発声が必要なのではあるまいか。しかも、それは相手に恐怖を与えるような動物的叫びではなく、相手も自分も落ち着かせるようなものが望ましい。わたしたちは、連続した個人の心理的時間に区切りをつけないと、新たな事態に移行しにくいのである。

もちろん、それだけではない。朝の挨拶であれば、大きな声で「おはよう」を言うことによって眠気を払うとともに、学校や職場での仲間意識を高めようとする場合もある。運動選手が試合前に自分の頬をたたいたり、練習のときに互いに声をかけあうといった、いわば気合の役割を果たしている。帰属意識、連帯意識を高めるということであれば、入学式、入社式、結婚式などもそれぞれ式全体が広義の挨拶であろう。やくざの仁義も、鈴木に言わせるなら、

「今までそこにいなかった人間が、有る集団に属するというそのけじめ」という意味で立派な挨拶である。

気持ちの切り替え、連続する時間を裁断する一撃という感覚は、別れの挨拶の方がもっと著しい。親しい人、愛する人と共有する時間が永遠であれば良いと願ったことはないであろうか。しかし、それがかなわぬ願いであれば、この快い共有の時間を断ち切って、自由ではあるが孤独の時間に戻るべく心を奮い起こさねばならない。「さらば...」、「しからば...」、「さようならば...」と暇を告げねばならないのである。子供のころの夕暮れ、「おみやげ三つ、たこ三つ」と互いに背中をたたいて帰って行った思い出を持つものは、わたしたちの世代に少なくない。痛いほどのあの一撃こそ、限りなく楽しい時間を裁断するための一撃ではなかったか。

しかし、挨拶は親しい間柄や顔見知りの間でなされるとは限らない。挨拶には、遭遇する見知らぬ人間を心理的に安定した共通の場に引き入れるという働きがある。マリノフスキーの言葉を借りれば phatic communion 「ことばによる共感（安心感）」を生み出す働きである。未開人にとっては、出会った相手が口をきかないことがどんなに彼らを不安にし、恐怖を抱かせるかわからない、とマリノフスキーは言う。しかし、それは、社会生活を送る者なら誰も経験することである。エレベーターの中で見知らぬどおしが二人きりになったときの不安や気まづさを思い起こせば良い。

3) コミュニケーション的機能

挨拶はまた、コミュニケーションを起動させる役割を果たしている。コミュニケーションが成立するためには、発信者と受信者が遭遇する場と、両者が用いる共通のコードが必要である。その点、挨拶は、言語コードを共有していることをわからせる、いちばん手軽で確実な方法である。

多言語社会でもいいし、国際的リゾート地でもいい。なめらかな「こんにちは」を聞けば、日本語が使えると安心する。それが《Bonjour!》であれば、相手は《francophone》であることがわかり、フランス語でのコミュニケーションが予測される。日本のように単一の言語でほとんどやって行ける社会はともかく、いくつもの敵対する民族が複雑に入り組んでいるような多言語地域や、未踏の地に足を踏み入れたときなどは、挨拶語を共有する相手を発見した安堵感、わたしたちの想像以上に大きいであろう。もちろん、挨拶だけでコードが確認されるわけではないが、少なくとも、その第一歩だということである。

挨拶はまたコミュニケーション開始の合図でもある。先にも述べたとおり、わたしたちは、突然ディアログに入りにくいのである。相手の姿が見えにくい暗がりとか、互いに知らない者どおしの場合にはなおのことであろう。そんなとき「こんばんは」や「失礼ですが」の一言は、相手を安心させると同時に交信を申し出る合図にもなる。

さらに、挨拶は言語だけの問題ではなく身振りがともなう。身振りには、コード化された身振り、すなわちある社会において、一定の意味をもつ記号としての身振りと、個人に属するまったく恣意的身振りがあるが、あいさつにおける身振りは、当然記号としての身振りである。別の社会の言語が理解できないように、別の社会の身振りは理解できないことが多い。挨拶は、言語によるコミュニケーションとノン・バーバル・コミュニケーションが連動した社会の約束ごとである。

挨拶は、生活の節目、すなわち人間と人間の接点に現れる。それは、社会生活という面では、出会う人間どおしの関係を伝達、確認する。心理的側面から見れば、挨拶は、連続する心理的時間における区切りであると同時に、知らない人間が出会う場合には、敵意のないことを伝えて相手に安心感を与える。言語、あるいはもっと広く、コミュニケーションという点で考えると、挨拶は共通コードを確認するとともに交信開始の合図としても役立つ。

一般的に挨拶と言われる行為は、言語行動と、表情・身振りなどの非言語行動の一体から成っている。従って、今後、「挨拶」の語を両者を含んだ最も広い意味に使う。言語行為としての一連の表現を「挨拶表現」、そして、いわゆる「こんにちは」や「さようなら」など、挨拶以外に使われることのない語を「挨拶ことば」と呼ぶことにする。

言語行為と非言語行為の一体からなる挨拶は、一定の意味と機能を担った社会の約束ごと、すなわち記号である。もちろんこの記号は一定ではなく、社会においても異なるし、時代とともに変化して行く。挨拶の根底にある共通した働きを検討したわたしたちは、次の章で、日本とフランスという異なった社会で、挨拶の具体的ありようがどのように異なっているかを見ることにしよう。

第2章 日仏の挨拶ことば

挨拶は日常生活の節目で、人間関係の接点において現れる。それは時間を区切る点であり、同時に複数の人間が遭遇する点である。この章では、日仏の挨拶ことばを、主として時間という面から考えてみたい。言語によって時間の切り方が違うとは、よく言われることである。確かに、《Bonjour》は「こんにちは」ではないし、《Bonsoir》は「こんばんは」と同じではない。しかし、ただ単に時間の切り方が違うだけではなく、「今」を境にして、過ぎた時間の方に関心があるのか、あるいは、やがて来る時間の方に関心があるのかもまた、挨拶ことばを考える上で大きな要素になる。半ば符号のように独立的に用いられる挨拶ことばの起源を考えることが、時間の問題に対する回答を与えてくれそうである。

1) Bonjour とこんにちは

挨拶が人類に共通する行為である以上、そして、北半球に位置する日本とフランスに四季があり、今では同じ太陽暦のもとにあって、しかも明治以降、日本の生活の欧米化が進んだ以上、日本語の挨拶ことばとフランス語の挨拶ことばに意味の重なりがあっても不思議ではないし、また、一方から他方への翻訳がスムーズに行われても不思議ではない。しかし、重なりがあるというのは、同じ意味だということではなく、重ならない部分こそが、意味論の上では問題とされる。

《bonjour》だけを取り上げてみても、まず、フランス語の方に「おはよう」にあたる語がないから、早朝から夕方まで終日これを使えるという事実を指摘しておこう。今では昼間を意味する jour は、もともと nuit に対立して光、すなわち明け方を意味するので、朝から使っても不思議はないのだ。

しかも、《Bonjour de la part de ma femme (妻からよろしく)》のように、この語自体が挨拶を代表しているし、また比喩的には、容易なことがらの代名詞にもなっていて《facile comme bonjour (ボンジュールのように簡単だ)》という表現がある。それほどに、bonjour の意味は広いのである。翻って「こんにちは」を辞書で引いても、「昼間、人に会ったとき、人を訪問したときのあいさつ」という説明しか出ていない。

それぞれの使われ方となると、違いはいっそう大きい。まず、ただの bonjour がある。顔を見知っている程度で、それ以上でも以下でもない人に対する bonjour。近所で出会ったり、同じ共同住宅の階段、廊下、エレベーターなどで出くわしたときの挨拶である。もう少し丁寧になると、《Bonjour, madame!》や《Bonjour, monsieur!》と madame や monsieur が加わる。それ以上親しい相手には、相手の姓や名を付ける。《Bonjour, Madame Martin!》、《Bonjour, Jeanne-Marie》という具合である。いずれにしても、挨拶表現は、長くなればなるほどいいいになって行く。

それぞれのことばが、どんなふう、どんな調子で発せられるかによって、さまざまなニュアンスが生まれる。ほほ笑み一杯に、生き生きとした声の《Bonjour!》と冷たい視線で、抑揚なく発音されることばの間にある意味の懸隔ははかり知れない。いや、もっと強い、敵意をこめた《Bonjour!》さえあるという。これは二度とかかわりをもたないことを内に含んだ bonjour である。例えば、しつこい押し売りに玄関ばらいをくわらせる時、「うちじゃ、そんなブラシはいらないよ。他をあたっとくれ。Bonjour Monsieur!」という具合である。この bonjour は、日本語の「こんにちは」より「さようなら」に近い。普通なら au revoir を使いたいところだが、これだと「また会いたい」ことになってしまうので、皮肉一杯に《Bonjour!》を使ったものと推察される。これにあたることばを日本語で探すなら「おとといおいで」にあたるであろうか。いずれにしても、挨拶本来の目的から大きくはずれた、という

よりはまったく逆の、コミュニケーションを拒否する使い方である。⁸⁾

これに対して、「こんにちは」の方には、bonjour ほど多様な展開は考えにくい。理由はいくつか考えられるが、一つには、「おはよう → おはようございます」はあっても、「こんにちは → こんにちはございます」とはならないからであろう。私たち古い世代の人間は、「課長、こんにちは」とか、「先生、こんにちは」とは言いにくく、「先生、お久しぶりです」とか、「ごぶさたいたしまして」とか別の表現を用いる傾向にある。ただ、最近読んだ話だが、出版者の新人研修で作家への原稿依頼の手紙を書かせたら、「先生、こんにちは」で始めたというから、ましてや話しことばで抵抗を感じる人はもう少ないのであろう。

「こんにちは」が使いにくのは、あるいは、これのていねいな形が考えられないのは、何よりも、もともとあった長い挨拶表現の省略形だからである。

現在われわれの用いている「今日は」や「今晚は」などは、形として不完全で、外国人ならばたいいは不審に思うのですが、事によるとこれも使用の区域が広がったために、はっきりとしまいまで言うてしまうことのできぬ事情があったからかもしれません。試みに今日はどうしたのだと聞き返すと、答えられぬ人が都会にはあり、また配給以前の出入り商人という者の中には、今日はいかがさまとか、何かご用はありませんかとか、続けて言うてしまう者がありました。そうすると、これはもう用件で、挨拶でも礼儀でもありません。田舎ではさすがにその言おうとすることを意識せぬ者はなく、また必ず天気のことを説いて、それがその日の作業に都合がよいことを喜びあっております。すなわち形式化⁹⁾はまだ都会地ほどはなはだしくないのであります。

柳田がこう書いてからすでに半世紀、「形式化はまだ都会地ほどはなはだしくない」とはもはや言えず、「こんにちは」と言う人達の多くは、それが例えば「こんにちは、良いお日とで...」の省略だとは考えないであろう。しかし、それに気づかない現代人でさえ、運動会では「本日は晴天に恵まれ」と言うし、日常でも「きょうは、いい天気ですね」とか「きょうは暑いですね」と言うから、わたしたちは天気に鈍感になったわけではない。ただ、挨拶ことば「こんにちは」も、元はといえば天気をたずねる表現の出だしであったことが忘れられてしまっているのだ。

2) 祈願型と確認型

このように、日本語の挨拶とフランス語の挨拶を一つ一つ比べてゆけば、興味ある観察結果が得られるであろうが、ここではそのゆとりはない。たまたま《Bonjour》と「こんにちは」を取り上げて比較したのは、二つの言語を代表する挨拶ことばを比べることによって、意味の

重なりはあるけれども、意味の広がりや用い方に大きな違いがあることを示したかったからにすぎない。

このことを踏まえた上で、今度は、出会いの挨拶、別れの挨拶を一望することによって、日仏の挨拶語それぞれに見られる一般的傾向を取り出してみたい。

普通レベル			親しい者に対して salut
おはよう	こんにちは	こんばんは	
bonjour		bonsoir	

普通レベル			親しい者に対して バイバイ salut, chao
さようなら		おやすみ	
bon après-midi	bonsoir	bonne nuit	
bonne journée	bonne soirée		
au revoir			

このように比べてみると、まずフランス語の方に特徴的なのが、名詞の前についている bon/bonne の形容詞である。これを見ただけでも、フランス語の挨拶ことばが祈願型の名残であることは容易に想像されよう。祈願型であればこそ、bonsoir は出会いのときにも別れのときにも使えるのだ。

フランス語の挨拶が祈願型なら、日本語の方は「こんにちは…」にしろ「さようなら…」にしろ、事実確認型である。いや、単に確認しているだけではない。雨が降っても「良いお湿りで」と喜んでいるから「言祝ぎ型」といいてもいいのではないか。フランス語の《Je vous souhaite une bonne année! (あなたにとってよい年でありますように)》は、祈願型であるから、年末でも年始でも使えるけれども、「おめでとう」の方は言祝ぎ型であるから、年が明けてからしか使うことはできない。それはまさに無事に明けたことそのものが「めでたい」、すなわち「喜ぶべきこと」なのだ。フランス語には相当するものがない「お帰りなさい」なども「ようお戻りなされました」という確認であり言祝ぎの名残であろうと思われる。

祈願型か確認・言祝ぎ型という分類は、未だ成就していない未来を見ているか、すでに事実となった現在・過去を見ているかの違いでもある。未来を向いているフランス人の挨拶は鈴木孝夫の用語を借りるなら「前傾性」が強く、事実を見つめる日本人の挨拶は「後傾性」が強いということになる。¹⁰⁾ わたしたちは過去にこだわり、「先日はありがとう…」、「この前はどうぞ」を頻繁に口にする。あまり何度も礼を言うので外国人は驚く。また、フランス語に訳しようのない「なつかしい」を連発することや、同窓会があればほど重要な意味をもつのも、この後傾性の成せる業であるかもしれない。

「お疲れさま」や「ご苦労さま」という挨拶は、後傾性という意味でも、また労働を尊重するという意味でも、きわめて日本の特徴を帯びている。実際、挨拶は生活様式を反映し、関心

の対象を端的に示しているのだ。「お疲れさま」や「ご苦労さま」をはじめ、「ご精がでますね」、「頑張ってるね」など、日本語の挨拶は労働に傾き、フランス語の挨拶は、《Amusez-vous bien!》, 《Bon week-end!》, 《Bon dimanche!》, 《Bonnes vacances!》など遊びに関するものが多い。

ところで、このように見てくると、大きな疑問が二つ浮かんでくる。一つは、フランス語の方が未来を祈願し、日本語の方が事実を確認したり喜んだりするのはなぜかということである。早急な結論はつつしまねばならないが、神と人との関係が、この問題を考える手掛かりとなるのではなかろうか。一神教の世界では、神の力はあまりに偉大であり、人間の力はあまりに小さい。特に、自分の手の届かぬ遠い所に旅立つ相手に対しては、強くそのことを感じるであろう。そのとき、人は相手を神の手に委ねる他はない。《Je vous recommande à Dieu.》だからこそ、アディユー (à Dieu) の語が生まれたのだ。英語の good-bye が God be with ye から生まれたのとはほぼ同じ発想である。

これに対して、神々がいたるところに住まいする日本人にとっては、神は遠く厳しい存在ではなく、拍手を打って呼べば答えてくれる近い存在である。天気が良いのも、雨が降ってくれるのも、すべてこれ自然と一体化した神々の仕業であり、喜ぶべきことなのであろう。しかし、こうしたことは類推の域を出ないから、今後確証を求める必要がある。

3) 省略の特徴

ところで、二つ目の疑問は省略の仕方にある。フランス語を用いる人間の生活も、日本語を用いる社会も、生活のテンポがだんだんに早くなって悠長な挨拶をしていられなくなるから、じょじょに短くなって一部が残ったのだろうということは簡単に推測できる。¹¹⁾しかし、それなら、なぜ日本語の方では、「こんにちは...」、「こんばんは...」、「さようなら...」のように文の初めばかりが残って、フランス語の方は、《Je vous souhaite le bonjour》, 《... bonsoir》のように最後ばかり残ったのであろうか。

一方では文頭が残り、もう一方では文末が残るのは、日本語、フランス語それぞれの言語の特色と関係があるものと考えられる。日本語の話しことばにあっては、音の上でも意味の上でも、文頭が強いのにに対して、フランス語ではその逆である。

メッセージが発せられる場合、普通、前に主題が、後ろに題述、すなわち述べるべき内容がくることが多い。

フランス語 Paul, il est méchant.

日 本 語 太郎ったら、意地悪なんだよ。

日本語の場合は、主題が強く発音され、情報を担う題述の方が弱く発音されたり、消えてしまったりすることが多いのである。これは、ものごとをあまりあからさまに言うものではないという、わたしたちの心性とも関係しているであろう。「春はあけぼの（がどうしたのだ?)」、「花は桜木、人は武士（がどうしたのだ?)」。人をけなすときによく言われるのは、「あの人はねえ…」である。「こんにちは、よいお天気で結構でございますねえ」が、「こんにちは、よいお天気で…」となり、最後には、「こんにちは」になっても不思議ではない。もちろん、あらゆる場合に日本人が大事な情報を落としてしまうということではない。落とせるときには落としてもいい、あるいは、あえて肝心のところを言わないで相手に推測させるのがおくゆかしいという考え方があるから、題述が消えても不思議ではない。

前章にも述べたように、挨拶は、それ自体として伝えるべき重要な情報を担っているわけではない。その上に、一種のかけあいとして繰り返し使われているので、主題さえ言えば相手が後を十分推測してくれるのである。この掛け合いが続いているうちに、相手が内容を推測できないほどに省略されてしまったのであろう。

それに対して、フランス語では、情報としていちばん大事な部分が文の最後に来て、ここにアクセントが置かれる傾向がある。いちばん強く明瞭に発音される部分であるし、話しことばでは最後まで残る部分である。例えば *Ce soir, tu vas où? — Ce soir, je vais chez Paul.* というやりとりを見よう。まず、繰り返す必要のない主題が消えて *Je vais chez Paul.* となり、次には、主体もわかるから、これも消えて情報としていちばん大事な *chez Paul* だけが残る。*Ce soir, tu vas où? — Chez Paul.* というディアローグは立派に成立する。*Je vous souhaite une bonne année.* でもことは同じである。最後の部分、しかも、音の上でも意味の上でも、これだけは消せない部分だけが残って *Bonne année!* となったのだ。名詞に具体性を付与している冠詞が消えてもいいのかという疑問があろうが、電報では冠詞も消えるところを見れば、挨拶のような特殊な場合には許されるのだ。

日本語においても、フランス語においても、挨拶ことばは本来明確な意味をもったメッセージであった。フランス語の挨拶ことばでは、まだ元の意味が推測されるのに対して、日本語の挨拶ことばの多くが意味不明になっているのは、それぞれの言語の特徴によるものと思われる。すなわち、フランス語では、情報としていちばん大事な部分が残ったのに対して、日本語では、主題の部分が残ったからであると推測される。日本語の挨拶ことばは、本来、現在を確認し、言祝ぐ意味をもっており、フランス語の場合には、未来の幸の祈願を意味していることが多い。日本語の挨拶が労働に傾き、フランス語の挨拶が遊びに傾くのも、このことと関係しているかもしれない。

第3章 身体から見た日仏の挨拶

第2章では、主として言語を中心に、時間の問題に絞って日仏挨拶ことばの違いを検討したが、この章では、身体に視点を移し、コミュニケーションの開始と終結に際して一定空間の中で人間どうしがどのように向き合うか、別の言い方をすれば、互いの身体をどのように対置させるかを考えてみたい。挨拶は意識の問題であり言語の問題であると同時に、身体の問題である。二つの文化の違いは、挨拶する人間どうしが距離を置くのか置かないのか、相互にどんな動作をするのか、身体的接触があるのかないのか、視線をどのように投げかけるのか、というところにまで表れる。いや、ことばよりもむしろ、こうした非言語行動において、違いはより明瞭に表れる。特に視線は、今後他の対象について日仏の文化を比較してゆく上でも、一つの重要な基準となると考えている。

1) 日本人の挨拶

第1章で確認したように、挨拶は言語と身振りが一体となった行動である。身振りは、「ことばに代わる記号として、私たちの伝達行動に広がりを与えている。」¹²⁾ また、「ことばに付随して、ことばそのものの働きを補足し、強化しているのである。

もちろん、身振りは身振りで、それぞれの社会においてコード化されており、言語が文化によって異なるように、身振りのコードもそれぞれの社会で異なっている。そして、それぞれの身振りを生きている人間たちの仲間内では、自分たちの身振りがそれほど特殊なものとは気づかない。例えば日本人のお辞儀であるが、これは外国人にとってはよほど特徴的なものとして映るらしい。¹³⁾ その証拠に、ユーロ・ディズニースランドの「It's a small world」では、日本人の人形は、まさに米つきバツタのようにお辞儀をしており、これだけでも日本人とわかるらしい。この異様な象徴的光景を目にして、改めて日本人の挨拶を観察してみると、なるほどまだまだお辞儀はわたしたちの社会で幅をきかせている。

お辞儀は、もちろん意味のない行為ではない。今日でも古い世代の人達は深々と頭を下げるし、畳の上でこの傾向は著しい。戸外や現代風の室内で出会うときも体を曲げているし、また体を曲げないまでも、少なくとも頭は下げている。それをしないと、「頭が高い」と不評を買うし、反対に「腰が低い」人は一般に評判が良い。

敬意は頭の下げ方や体がかがめる角度からだけではなく、かつては頭を下げている時間からも判断された。旧世代の挨拶が長くていねいであり、新世代の挨拶が短く簡単であることは、いつの時代も変わらない。戦前と戦後の違いはもちろんのこと、江戸の人間と明治人の差もさぞ大きかったであろう。『我輩は猫である』の一節がそのあたりの様子を、見事に、しかも

ユーモラスに伝えている。¹⁴⁾

「苦沙弥君これが毎々君に噂をする静岡の伯父だよ。伯父さんこれが苦沙弥君です」

「いや始めて御目にかかります、毎度迷亭が出て御邪魔を致すそうで、いつか参上の上御高話を拝聴致そうと存じておりましたところ、幸い今日は御近所を通行致したもので、御礼旁伺った訳で、どうぞ御見知り置かれまして今後共宜しく」と昔し風な口上を淀みなく述べた。主人は交際の狭い、無口な人間である上に、こんな古風な爺さんとは殆ど出会った事がないのだから、最初から多少場うての気味で辟易していたところへ、滔々と浴びせかけられたのだから、朝鮮仁参も飴ん棒の状袋もすっかり忘れてしまって只苦し紛れに妙な返事をする。

「私も ... 私も ... 一寸伺がう筈でありましたところ ... 何分よろしく」と云い終って頭を少々畳から上げて見ると老人は未だに平伏しているので、はっと恐縮して又頭をぴたりと着けた。

体を曲げ、頭を下げることは、また自分の体を預けるということでもあって、「場合によってはどうされてもかまわない」ことを意味している。普段わたしたちはそのことを意識しないが、謝るときには本来の意味を思い知らされるし、土下座という異常事態が出現するとき、このことは、いっそうあらわになる。

日本人のあいさつが、たて社会の関係の表現であったことは、浄瑠璃や歌舞伎を見ればよくわかる。お辞儀の仕方は挨拶する二人の関係で微妙に変わっているが、現代社会でも少し注意して見れば、決してなくなっているわけではないことがわかる。恭順、服従の姿勢を示す日本人の挨拶は、相手に「身をさらす」挨拶であるが、それはまた、己を「相手の目にさらす」挨拶であると言えよう。すなわち自分は目を伏せて、相手の視覚にとらえられるためのものである。¹⁵⁾

現在では、対等の関係で話す場合が多くなり、相互に視線を交わすようになったから、確かに相手の目を見ているのだが、それでも、その見つめ方はヨーロッパ人やアラブ人のそれと違っている。ヨーロッパ人の場合には、話をしている間、相手の目をのぞき込むように話すし、アラブ人の社会では痛いような視線を感じるという。それに対して、日本人の場合には、話し相手の目を見ることはあっても、いわゆる凝視ではなく、相手の目を見てはすぐにそらし、また相手の目にもどってくるというような視線の動きであることは、少し観察すればわかることである。

日本人が従来、視線を避けてきたのは、目が肉体の一部でありながら意識に通じており、凝視することは、意識と意識が対決することを意味したからであろう。すべてをことばに出すこ

とを好まなかったわたしたちの祖先は、やはり、すべてを知るために相手の目の奥を覗き込むことは避けたのであろう。それは、日本人に好奇心がないということではない。わたしたちの好奇心は、¹⁶⁾ 見ていることを知られないときにのみ発揮されるのだ。少なくとも、現前する人間に対するわたしたちの挨拶は一定の距離を置く挨拶であり、まなざしを避ける挨拶であった。

2) フランス人の挨拶

これに対して、フランス人の挨拶が、視線を交わす、見つめ合う挨拶であることは、誰の目にも明らかであろう。握手をする場合にも、しっかりと目を見て手を握るのが礼儀にかなっている。握手はフランス人にとって友好関係を確認する第一歩である。というのも相手の手を握ることや、相手を抱擁することが、中世においてどれほど危険であったかは容易に想像できるからである。指輪に塗った毒で相手を殺すというのは、決して推理小説の中の話ではない。頭を下げる日本人が自分の身を相手にさらしたように、抱擁したり、握手したりする人間どうしは、互いの身を相手に預けることになるから、よほどの信頼関係が必要であったはずである。その名残で、現代でも敵意を感じている相手には握手をすることはないし、昨日まで握手していた人間が、手を出さなくなったら明らかに関係が変化したことを意味するのだ。

挨拶のときに帽子をとる習慣も、もとはといえば、相手に対する信頼関係の表れである。男性の帽子は本来兜の名残りであって、武具を脱がないということは、いつどこから攻撃がくるかもしれないから身構えていることを、すなわち相手を信頼していないことを意味したのだ。従って、室内での帽子はこれをとることが礼儀であり、信頼の記号である。これが習慣化して行くうちに、すれ違いざまに《Bonjour》を言う時など、ちょっと帽子に手をやる仕草になったものと思われる。この仕草を、《donner un coup de chapeau》と言う。脱帽が敬意の印であることは、相手が素晴らしいことをした場合や言った場合に《Chapeau!》と叫ぶ習慣に残っている。

ところで、一見無意識に行われているように見える握手も、礼儀である限り一定のルールがある。まず、手を出す順序であるが、女性から男性へ、年長から年少へ、地位の高い人から低い人へということになっている。このことから、握手が決して対等のものではなく、服従・¹⁷⁾ 臣下の発展形態であろうことは推察される。さらに、姿勢はしゃんとして、相手の目をしっかり見て、あまり長くにぎらない、激しくふらないことなども心掛けるべきことである。長く、ジワーッとにぎってはいけないというのは、特別な意味をこめないということであり、激しくふらないというのは、もちろん相手に不愉快な思いをさせないということであり、指輪をしている相手に対する考慮もある。欧米人の中でもフランス人の握手好きはかなり目立つようである。

握手における順序が出たので、人を紹介する順序に触れておこう。男性を女性に、年少を年

長に、地位の低い人を高い人に引き合わせる。なぜ、紹介が問題になるかという、紹介は、もっとも広義の挨拶行動に含まれると考えるからである。それ自体が挨拶ではないとしても、少なくとも挨拶に連続する行為、挨拶と挨拶をつなぐ行為と言えるからである。挨拶が一つのコミュニケーションを起動させるとすれば、紹介は新たなコミュニケーションを開く。中に立つ一人が二人の知らない人間を結ぶというこの三角関係は、無限にコミュニケーションを増殖させてゆく役割を果たす。

そして、この紹介という広義の挨拶行動にこそ、日仏の大きな違いがあると言っても過言ではない。日本人のパーティや、結婚披露のテーブルなどでは、内輪の人間ばかりが集まって盛り上がり、たまたま輪の外にいて退屈した経験はないであろうか。フランスの家庭に招待された人達が驚くのは、自分の知らない人が招かれていて、次々と関係が広がってゆくことである。小林善彦は、日本の社会が内輪中心の社会ならフランスの社会は外輪中心で、関係が外に向かって広がるところに特徴があると言っている。¹⁸⁾

さて、握手にもましてフランス人に目立つ挨拶はビーズ (bise) である。親しい人たち、特に異性の友人、恋人、家族の間、女性同士の間で、頬にする、軽いそして乾いた音のキスである。いずれにしても、親しい者、特に愛しあっている者どうしの接触度は、ヨーロッパではフランス人が一番高いようで、レストランで体をくっつけ合うように食事をしている様子は、イギリス人などには、かなり異様に映るらしい。それはともかく、bise も良く観察すると面白いことがわかってくる。まず、父親と息子の間では、息子が一定年齢に達すると自然消滅する。が、長い別れのときなどは自然と抱擁が交わされる。男性同士が久しぶりに出合ったときには、肩を軽くかく accolade が行われるが、これは遠く騎士の時代にまで溯る。

ビーズの回数であるが、これがけっこう難しい。というのは、地方によっても家族によっても回数が違うからである。1 回片側だけですます人、左右 1 往復する人、3 回する人などさまざまであるから、一方はもう終わりだと思って身を引くのに、相手はまだ次を待っているというような、きまりの悪いこともおこってしまう。

身体の接触である以上、いつも、誰もが好んですとは限らず、相手によってはいやな場合もあるはずである。マルセル・エメの童話の一節は、そのところをよく表している。

「メリナおばさんは、すごい年寄りで、とっても意地悪、歯はないし、あごには、お髭がいっぱいいます。二人がおばさんに会いに行くと、やたらキスをするのですが、二人はこれが、まずたまらないのです。だっておひげでチクチクするし、おまけにおばさんは、このときばかりと二人をつねったり、髪の毛をひっぱったりするのですから。」¹⁹⁾

これに対して、プルーストの思い出に残る母親のお休みのキスなどは、小説の何ページを

も費やしている。母親の方にすれば母性の発露ではあっても、感覚と官能が本来は一つであることを子供の方に無意識の内に理解させるものであろう。まさに、眠りにつく前にささやかれる母親の《Bonne nuit!》とビーズは、ことばと行為が愛情の中に溶け合っているがゆえに、成人してからも、意識と身体との混然一体となった記憶となつて蘇るのである。²⁰⁾

道の向こう側を行く人に対する会釈や脱帽から、軽く交わされる bonjour、そして、さらには言葉がだんだんに長く丁重になる挨拶へと進む。もっと親しい関係の相手には、ことばに握手やビーズや抱擁がともなう。心理的に遠い者から近い者へと移るにつれて両者の距離は次第に小さくなり、身体と身体が触れるとき、ついにはゼロに至るのがフランス人の挨拶である。

日本人の挨拶が、主として聴覚とカンに頼る挨拶であるとするれば（いつ相手が頭をあげるかを気配から推測する必要がある）、フランス人の挨拶は、さらに視覚と触覚が機能する挨拶である。日本人が距離を置き、身体の動きで敬意を示すとするれば、フランス人は身体を接触させることで信頼関係を表明する。距離を置くにせよ、距離をゼロにするにせよ、挨拶は、それだけで独立しているのではなく、相手を必要とし、コンテクストを必要としているゆえに、具体的空間の中で行われ、その前後の行動とつながっている。「こんにちは」や《Bonjour!》は、単なる言語形式の問題ではないのだ。

お わ り に

言語行動と非言語行動の一体からなる挨拶行動は、一定の意味と機能を担った社会の約束ごと、すなわち記号である。もちろんこの記号は一定ではなく、社会において異なり、時代とともに変化して行く。

日本語の挨拶ことばは、今では意味不明のものが多く、本来は結果としての現在を確認し、言祝ぐ意味をもっていた。それに対して、フランス語の挨拶ことばは、祈願を意味していることが多い。両方の言語とも、元の、もっと長い挨拶表現の一部であるという点では共通しているが、日本語で主題の部分が残る、フランス語で題述の部分が残っているのは、それぞれの言語の syntaxique な特徴と音声面での特徴に由来するものと思われる。

挨拶ことばは、まなざしや表情や身振りや連動して展開されるが、そうした非言語的側面にこそ違いは一層明瞭に表れる。日本語では、挨拶する人間どうしが距離を置き、両者の社会的関係に従って、一方は見ない者であり、他方は見る者となる。しかし、見る側よりも見ない側としてしつけられている場合が多い。すなわち、わたしたちの場合は、視線を避ける挨拶である。これに対して、フランス人の挨拶の特徴は、視線を交わすことであり、距離をゼロにすることである。すなわち、握手にしろ、ビーズにしろ、身体を接触させるところに特色がある。

こうした結論は、それ自体決して誤ってはいないであろう。ただ、一連の考察において、そう簡単に言い切れるかどうか、という疑問がわいてきたことも事実である。

まず、「記号」ということばを使うと、どうしても *paradigmatique* な側面ばかりが強調されて、*syntagmatique* の側面を見失う恐れがある。「こんにちは」や《Bonjour》それだけをとりはずして語るのは容易であるが、挨拶は、例えば、第2章の迷亭の伯父さんの挨拶に見られるように、わたしたちが「挨拶ことば」と呼んだ語にとどまらず、十分な意味を含んだ *discours* の一部であり、それと分かちがたく結びついているのである。だからこそ、挨拶ことばは、独立した品詞とはならないで、メッセージの一部を成しているのである。そう考えると、話しことばでは口上や式辞、書きことばでは、結婚、出産、死亡通知などをも検討の対象に入れて比較をせねばならないであろう。

この論文の本来の目的は、「挨拶」を出発点として日仏の文化を比較することであり、当然その方向に向けて広がってゆかねばならないが、一方で、「挨拶行為」そのものに対する言語社会学的興味があふくらんできたことも事実である。いずれにしても研究は端緒を開いたばかりである。

注

- 1) 筆者はフランス語の授業において、日仏の意味論的比較や文化比較を極力避けてきた。その理由は、外国語教育は、その対象外国語を使えるように指導することだという信念をもっていたからであり、今もその点は変わっていない。しかし意味論的比較や文化比較が不必要だと考えたのではなく、興味ある人達のために参考文献を配布するという形で、その必要性を補ってきた。
- 2) 本論では十分触れることができなかったが、相手をどう呼ぶかという問題は、挨拶の問題と深くかかわっている。一つには、挨拶ことばの前後に現れる「呼称」の問題がある。名前だけで呼ぶか、姓で呼ぶか、さらには敬称をつけるかである。また、見知らぬ相手をどう呼ぶかについても、現在の日本語はきわめて複雑であり、呼称の体系は統一されていない。挨拶をもっと長い単位で考察するとすれば、当然軽視できない問題である。
- 3) 森 鷗外『雁』、鷗外選集 第3巻、p.212.
- 4) 折橋徹彦「あいさつコミュニケーション」、石川弘義編『日常コミュニケーションの社会心理学』II, 2 pp.69-111. 折橋は、ビュラー (K. Bühler) の用語を自分流に使っているように思われる。
- 5) (座談会 あいさつ・身体・空間)における鈴木孝夫の発言。『言語』特集 あいさつの言語学 1981, Vol.10, No. 4, p.45.
- 6) 鈴木孝夫「挨拶論 あいさつの言語社会学的考察」、『ことばと社会』, p.73.
- 7) 大木 充「マダムが肩をすくめるとき ノンバーバル表現」、田辺 保編『フランス語で言えば』第7章、pp.222-253.
- 8) この指摘は、フランス語の挨拶ことばに関する筆者の問いに対して、友人の Jean-Paul HONORÉ 氏が寄せてくれた非常に詳しい説明の一部である。
- 9) 柳田国男『毎日の言葉』pp.82, 83.

日 仏 文 化 比 較 試 論

- 10) (座談会 あいさつ・身体・空間)における鈴木孝夫氏の発言。『言語』特集 あいさつの言語学 1981 Vol. 10, No. 4, p. 58.
- 11) 日本の場合、玄関や縁側がなくなってきたことも挨拶の簡略化と関係しているのかもしれない。
- 12) 本名信行「ジェスチャー、空間配分、そして手話」、『日常と行動の記号論』, p. 161.
- 13) ルイス・フロイスも、日本人が立ち話をするとき「身分の低い方は両足をそろえ、手を帯のところに組み合わせ、身体を前に屈め、相手の話に応じてヨーロッパの婦人のようにお辞儀しなければならない」と書いている。

ルイス・フロイス著 岡田章雄訳注『ヨーロッパ文化と日本文化』, p. 190.
- 14) 夏目漱石『我輩は猫である』, p. 318.
- 15) 「かつて、武家の社会においては、目上と目下の関係は、目下のものが目上の者から一方的に見おろされるという関係にあった。目下の者は、「オモテをあげい」とでもいわれないかぎり、見あげることができないのであった。どうしても見あげなければならないときには、「おそれながら」と願い出て、はじめて見あげることが許されたのである。言いかえれば、他者をじっと見すえることができたのは、かつてのわが国においては、支配者のみ特有の表情であった。おおかたの人は、ミウチやナカマウチを離れると、ただ見られるだけの存在にすぎなかった。したがって、あまりに見すえられると、目をそらすだけが、民衆に許された自由だったのである。面を伏せる。伏し目がち。あるいはまた、目をそらす——そんな視線の演技が、人間関係の場面における、民衆の一般的な対面形式だったのである。」井上忠司『まなざしの人間関係』, 講談社現代新書, pp. 118-119.
- 16) 鶴見和子『好奇心と日本人—多重構造社会の理論』, 講談社新書
- 17) 多田道太郎『しぐさの日本文化』, 筑摩書房, p. 52-58.
- 18) 小林善彦『フランスの知恵と発想』, 白水社, pp. 28, 29.
- 19) Marcel Aymé *Les contes du chat perché*. p. 13.
- 20) Marcel Proust *Du côté de chez Swann, A la recherche du temps perdu*. Garnier-Flammarion, pp. 106-107.

参 考 文 献

- 池上嘉彦 / 中山桂一 / 唐洲教光『文化記号論 ことばのコードと文化のコード』, 講談社学術文庫
宇波 彰『記号論の思想』, 講談社学術文庫, 1995.
- 泉 邦寿『フランス語を考える 20 章・意味の世界』, 白水社, 1978.
『フランス語の意味の散策』, 大修館書店, 1989.
『フランス語の語彙と表現』 一歩進んだ語彙と意味の世界』, パベル・プレス, 1993.
- 大木 充「マダムが肩をすくめるとき ノンバーバル表現」, 田辺 保編『フランス語で言えば』, 有斐閣選書, 1985.
- 折橋徹彦「あいさつコミュニケーション」, 石川弘義編『日常コミュニケーションの社会心理学』, ブレーン出版, 1978.
- 小林善彦『フランスの知恵と発想』, 白水社, 1987.
- 鈴木孝夫「挨拶論 あいさつの言語社会学的考察」, 『ことばと社会』, 中央公論社, 1975.
- 多田道太郎『しぐさの日本文化』, 筑摩書房, 1972.
- 鶴見和子『好奇心と日本人—多重構造社会の理論』, 講談社新書
- 本名信行「ジェスチャー、空間配分、そして手話」, 講座・記号論 4『日常と行動の記号論』, 勁草書房, 1982.

中 村 啓 佑

- ルイス・フロイス『ヨーロッパ文化と日本文化』, 岡田章雄訳注, 岩波文庫, 1995.
東山安子 / ローラ・フォード「あいさつにおける言語行動と非言語行動の日米比較」, 『言語』1982,
Vol. 11, No. 13.
エドワード・T・ホール『沈黙のことば』, 国広正雄, 長井善見, 斎藤美津子訳, 南雲堂, 1966.
夏目漱石『我輩は猫である』, 新潮文庫, 1982.
森 鷗外『雁』, 鷗外選集 第3巻, 岩波書店, 1979.
柳田国男『毎日の言葉』, 角川文庫, 1969.

Marcel Aymé *Les contes contes du chat perché.*, Gallimard, 1994.

Marcel Proust *Du côté de chez Swann, A la recherche du temps perdu* Garnier-Flammarion, 1987.

1995年9月30日 受理